

	日向南部			対州(上)			対州(下)		
	吹貫、浦尻 2ヶ統			佐須奈、津柳 2ヶ統			唐崎、瀬、豆酸 3ヶ統		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
本年	158	159	156	11.8	12.0	12.2	12.1	12.0	12.2
前年差	-0.9	-0.5	-0.8	-1.5	-1.5	-1.2	-1.9	-2.0	-1.8
平年差	-1.7	-1.2	-1.0	-2.7	-2.2	-2.0	-2.6	-2.5	-2.4
	平均 -1.3℃			平均 -2.3℃			平均 -2.5℃		

	対州(東)		山陰			五島		
	赤島 1ヶ統		津摩、川尻 2ヶ統			斑、三浦、早房、細硫 立小島、三井梁、高崎 岩瀬浦 8ヶ統		
	上旬	中旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
本年	12.2	12.0	11.3	10.4	10.1	12.4	12.4	12.4
前年差	-1.6	-1.1	-1.0	-1.5	-1.7	-2.1	-1.5	-1.2
平年差	-2.1	-1.7	-2.1	-2.9	-3.0	-2.3	-2.2	-2.1
	平均 -1.9℃		平均 -2.7℃			平均 -2.2℃		

山陰は低水温の影響でブリ貧漁、

対州、五島は低水温(平年より2℃余低)とシケのため
全般に不漁。

7 日本海における異常現象の実態

日本海区水産研究所

日本海区水産試験研究連絡ニュースオ144号、

1963年5月による。

(1) 海況

今冬の裏日本はまれにみる大雪でとくに新潟県以西の県においてひどく、その被害は相当なものであつた。さて海においても冬から春にかけて太平洋を初めとし全国的に異常な海況が現われている。日本海側は太平洋ほどではないが、やはりその傾向が見られる。本年2～4月の観測結果によれば、能登以西海域では平年より $2^{\circ} \sim 3^{\circ} \text{C}$ 低く、異常低温を示す。能登以北海域では平年よりやや低目の程度で北方海域は平年差が少くない。日本海沖合を流れる暖流才2、才3分枝は例年より弱い。とくに才2分枝が不明瞭。このため、山陰から能登沖に存在する隠岐冷水域、山陰若狭冷水域、能登佐渡冷水域と称する各冷水域は一連のつながりを持ち、沖合冷水域と一しよになつて冷水域の異常発達がみられる。この兆候は昨秋からみられていたがこの冬春一層強く現われてきた。

(2) 漁況

前記海況変動により、漁況も平年よりかなり変つてきている。すなわち、水温がもつとも低温化された山陰沿岸には例年みられる越冬期のアジ、サバは全く不振で、この地方の旋網は大不漁であつたのに対し、日本海北部海域、とくに富山湾から佐渡周辺海域には、濃密な越冬サバ漁場が形成され、旋網は大漁を示した。また近年富山湾と両津湾内の定置網にはサバ漁がほとんどといってよいほどみられなかつたが、本年は久しぶりに定置網にも好漁を見、冬ブリの不振をサバ漁で挽回するといった漁況を示し、山陰地方とは全く対照的な現象をみせた。このほか、佐渡周辺で、3月中旬に大中羽イワシの漁獲があり越冬場の北偏をしめし、島根県沿岸には釣によりカラフトマスが漁獲されるなど変つた漁況がみられている。

(3) 魚類の斃死現象

今冬の豪雪と海況の低温化に関連してか、局地的だがかなり多くの魚類の斃死現象がみられた。とくにひどい山口と島根の県境を中心とする沿岸海域で発生した状況を見ると、斃死した多くの魚は比較的沿岸性で定着性の強い魚にみられ、アイゴ群が水深20~40mのごく沿岸部に2月初旬~3月末連日のように斃死浮上をみた。当初の2月7、8、9日の3日間30~50尾/日程度アイゴ浮上、同10~14日は急増し小型漁船は斃死魚スクイ専門に出漁1万尾/日以上、5日間で5万尾以上のアイゴをすくいとつた。2月15~16日ごろからやや下火となったものの200尾/日以上、多い日は600尾もの斃死浮上が続いた。また、3月に入りカワハギ(約800尾)、メジナ、アカタチなど斃死をみた。当地方1月1日から雪に見舞われ、2月3日まで降雪のない日はわずか6日間、しかもこの間1日も出漁できなかつたという。明治以来の珍現象と地元漁民は云い、卓越風の強かつたことを物語る。また、斃死海域付近の地形環境は田万川、高津川から放出される雪どけ水もかなり多かつたと思われる。一方表面水温は10°C~11°C台で、例年より3~4°C低く、異常低温を示す。このことは沖合冷水域の接岸もあるが、ごく沿岸なるため陸水の影響を受けやすいことも考えられる。以上のような環境からして、沿岸性で移動の少ない魚類にとっては最悪の条件となり、逃場を失なつたものと思われる。このほか対馬の厳原沿岸でブリ、タイ類、新潟県沿岸では多量のタコの斃死が現われている。以上のように、本年は豪雪、海況の低温化、漁況の変動、魚類の斃死現象などが発生し、日本海でもあらゆる面に変動期を迎えたようである。今後のサンマ、ブリ、イカ、マグロ、底魚等漁況にどのような影響を与えるか重要問題であり、十分な調査体制を期待する。

【追補】 今春西部日本海の異常漁況

(日本海区水産研究所、連絡ニュースオ147号宇田抄録より)

6月18日開催、西部日本海連絡協議会での各府県水試の報告を日水研でとりまとめた結果、今春日本海漁況の地域的2現象：(1)隠岐-能登間海域で暖流系魚種が一様に不漁、距岸10哩以上の漁場はほとんどかい滅状態、(2)隠岐海以西海域では種々の魚の仮死、斃死が大規模且つ長期にわたって出現を報告された。

(1) 海域の例年とくらべての特異漁況は、

イ 旋網漁獲 サバ、アジ、イワシ類、ブリ全く不漁。

ロ ごく沿岸小型刺網で大型サバ、ブリ等漁。

ハ 山陰漁場例年5～6月来遊の豆アジ本年皆無。

(アジ、サバ等暖流系魚種の他海区からの日本海区への補給少く、今後資源動向に注目を要す)

ニ 底着アマダイ(若狭湾)漁皆無、例年当期中底棲小ブリ(兵庫)浮延以繩のみ漁。

以上本年春当域暖流性底棲魚類は下層冷水の影響強きため逃避したのであろう。

(2) 海 域

イ 沖合、底棲魚種……タイ、アマダイ、アラ、ブリ、カワハギ、これら魚種の仮死は量的に少ないが、2月上旬～5月上旬頃までの長期に亘り、主に沖合離島周辺の冷水域接近海域に現われている。

ロ 浅海性の魚種……アイゴ、ウスメバル、メジロダイ、アイナメ、オキナメジナ、以上魚種は、島根、山口両県各地において数万尾に及ぶ仮死または斃死が2月上旬～4月上旬(とくに2月下旬～3月上旬)に集中的にみられた。これはアイゴに代表されるように、ごく沿岸汽水に生活しているため、主として「雪しろ水」の影響をうけていると考えられる。